

# 小田原史談

第105号

発行所 小田原史談会  
小田原市南町2-3-21

## 後北条氏秘話

(1)

### 石垣山一夜城の悲劇

中野敬次郎 執筆

茶人山上宗二の生混…………… (五)

(一)山上宗二の面貌は

果たして醜悪か

瓢庵山上宗二という人はまことに気の毒な男で、悲劇の生涯を送った上に、後世からいろいろ根拠もない悪口を言われる。石垣山での最後が太閤秀吉に耳と鼻とを削がれた上に刺し殺されたと言うのである。こんな惨酷な仕打ちを秀吉ともあるう人物が自ら直接手を下してする筈はないと思うが、これは有名な茶道書の「長閑堂記」に茶人久保利世が語っているところであるので、強いて否定はできない。

今の人には十分な根拠もなしに次のようなことを書く人もある。それは宗二は北条氏直の使用した謀報家

で、秀吉が小田原を攻めたとき、氏直は山上宗二の仔細な通報によって万事を承知し、とうてい齒の立つ相手でないと思ったというのである。「宗二はもと堺の町人であり利休の弟子だったが、当時は氏直の庇護の下にあった彼は旧縁をついて秀吉の陣中にもぐりこみ、茶好きの武将たちに点前などして慰めながら情報を集めていたのである。しかし、そのうち氏直の放った間者と知れて秀吉に耳を削がれ、首をはねられた」と書いているが、何の資料を根拠として説いているのであろうか。宗二は性剛直で、その上に容貌が醜くかったというのには知られたことで、この面

貌の醜悪ということが、彼自身に悲劇をつくらせることになり、後世に悪しざまは言われる主な原因を作っているように思うが、これも「長閑堂記」に「かの山の上の宗二は薩摩屋とも云うし、堺にての上手にて、物をもしり、人におさるる事なき人なり。いかにしてもつらくせ悪く目あらき者にて、人のにくしみ者なり」と極言しているところからはじまっているようである。果して宗二の顔は憎々しい顔であったのだろうか。宗二の名著、「山上宗二記」を見ると、冒頭に序文のような型で茶道の由来を述べている。しかもそれを東山殿尼礼義政を中心にして記している。義政が東山の山荘を築いてここで風流三昧の生活を送っていたがいつしかその風流無為に退屈して何か他に面白い遊びはないかと、能阿弥にたづねたところ、能阿弥の答えに、奈良の称名寺に珠光と

いう人物があるが、この人が茶道を深く極めたすぐれた者であるとして、その精神的な深さから口伝、密伝にいたるまでを話したので、義政は珠光を召し出して師匠として一世の楽しみこの事なりと励んだ。そして茶道せざるものは人非人に等しと言われ、諸大名は言うに及ばず、下々ことに京都、堺の町人にいたるまで茶湯を第一とするに至ったと、その繁栄ぶりをほめたたえて述べているものである。しかし、天正十六年という秀吉の全国統一時代に、秀吉に迫られて流浪中に書かれたこの書物の中には、宗二の意思が深くこめられているように思われる。織田信長も豊臣秀吉も、茶の世界に君臨するのに余りに専制すぎた。茶道は最も人間的な庶民的なものである。相互信頼の上に成立しなければならぬのに、彼等専制君主たちは、権力と血にまみれた手で茶道を支配していったのである。

宗二の東山殿尼礼義政は、義政が茶道の無害な擁護者であることをたたえているので、その裏面を見ると、信長、秀吉らは義政とちがった成り上がり者の横暴として腹の底であざけり笑っている心が、或は腹にすえかねた茶湯者の怨念が言外にこもっているのではないのか。

織田信長は茶を愛した部将の佐久間正勝(不于斎)を、石山本願寺戦のとき茶の湯に耽って怠慢したという罪を問うて、父信盛とともに高野山に追放している。信長は武野紹鷗の歿後、その子孫に不当の圧迫を加え紹鷗の子武野宗瓦を河内に追放している。秀吉は宗二を殺し、利休を殺している。徳川家康も吉田織部父子を大阪方に加担の志があると殺している。このように専制君主の犠牲となつた茶人は多いが、宗二は最も苛酷な被害者であった。これらは乱世修羅の時代の茶道の悲劇である。凡そ古い力の世界では新しいもの、その新しい力で古い力の世界に対抗してくるものに向って恐れを感じ太々しい「憎さ」さえも覚えるようになってくる。しかも社会や民衆はこれを太々しい憎さと感じないで容認し、むしろ歓迎する場面が多いのである。戦国時代の経験はこれに通ずるものであって、例えば、山上宗二が最後に身を寄せた小田原北条氏について見ても、始祖の北条早雲と二代氏綱は鎌倉時代以来、専制と権力のみで関東を支配してきた旧勢力に對してはひたすら民政を旗

るに新しい強力な行動で押し進めて、遂に関東の征覇を掲げている。そこに彼等に対して、その行動を容認しながらも、太々しい憎さの男という感情が残っていたのではないだろうか。

彼等の行動を仰いで記念の肖像を描き残しながら、箱根湯本早雲寺にある二人の画像を見ると、早雲の像をあらわしながら、どこかに憎々しさを漂させた顔に描かれている。氏綱の画像については、「北条五代記」の作者三浦浄心が「金陽山早雲寺に於て、氏綱の画像を愚老拜見せしに、俗躰にして白衣の上に掛籠をかけ、顔相にくていに画けり。物すさまじく有て、ときめんに向いがたし子細あるにや、荒人神のよう」に写せり」と述べている。本当はそんな悪相であったとは思えない。宗二も同じような立場で、太閤秀吉という強大な権力者の主張する書院式茶道、大名茶に真っ向から反対して、佗茶、庶民茶道を主張したのに対して、太々しい憎い奴と思われたにちがいない。

それが宗二の悪相面であったという伝説につながるものであろうか。「長閑堂

「記」に久保権太夫が書いて  
いるのは「いかにしてもつ  
らくせ悪く、目あらし者に  
て、人のにくしみ者なり」  
とまで述べているのは、い  
かにもひどい書き方で、果  
たしてそんなに面構えの  
悪い男だったのであろうか

宗二の経歴を見ると、不  
運になったのは秀吉の追故  
を受けてからである。その  
以前は、二十五歳の時から  
実に約二十年間は信長、秀  
吉の愛顧をうけて、師匠千  
利休とほぼ同格で各大茶会  
の茶頭として光栄の道を歩  
んでゐる。師利休にも二十  
年仕えて愛せられ、前掲に  
何回も述べたように自分も  
立派な弟子を持って仰がれ  
至玉の著書「山上宗二記」  
を残している点などから考  
えると、そんなに面くせが  
悪く人の憎しみを買うよう  
な男ではこれだけの業績を  
挙げることは許されないと  
思われる。長岡堂久保権太  
夫は宗二と同時代の人であ  
るから、彼の記事をあなが  
ち否定はできないけれども  
いささか誇張が過ぎるよう  
だ。宗二が剛舌で直言家、  
悪く言えば毒舌家であった  
ことは確かだ、これが遂に  
身を滅ぼすことになったと  
いう。

(二)井戸茶碗の賞翫  
直言家、毒舌家は山上家  
の家伝のものであるらしい

宗二に道七という息子の  
あることは、すでにその名  
を数回前記したが、この人  
は宗二の子であるが薩摩屋  
を名乗らず伊勢屋道七と称  
した。茶は父にならったの  
で、号を凡齊と言った。伊  
勢屋と名乗ったのは、堺の  
富商伊勢屋道和の養子とな  
ってその家を継いだからだ  
という。宗二が天正十六年  
上方を浪人して小田原に移  
った時桑山重晴に与えた秘  
伝書(山上宗二記の一本)  
の奥書に、今度浪人して遠  
くの旅に出るに当って、道  
七を預けておいておいて独  
りで独りで行くことを記し  
ていることから、この時、  
父と別れて堺に留ったとき  
恐らく預けられたのが堺衆  
の伊勢屋であったのだろう  
宗二はこの時、天正十六年  
正月二十一日利休流茶道秘  
伝書を道七に授けているが  
この伝本が「山上宗二記」  
の一本として現在に残って  
いる。天正十八年父宗二が  
小田原で歿してから、一時  
は徳川家康の茶頭となつて  
いたが、父に似て短気で毒  
舌家であったので、遂に家  
康の怒りに触れて所払いと  
なつて伊予にのがれて、当  
時伊予在城の藤堂高虎に客  
分として仕えたという履歴  
まで明らかであるが、その  
後のことはわからない。

薩摩屋肩衝、宇治橋茶壺

虚堂墨蹟などを父から譲ら  
れて所持していた。  
この道七についても「長  
岡堂記」に次のように記し  
ている。  
「其子道七とて故相国様  
の茶道して御奉公申せし、  
又父の伝をうけて、短気の  
口わる物にて、上様御風炉  
の内遊されし跡を見て、つ  
きかへつ仕直しけるにより  
て、御改易にあい、牢人し  
て藤堂和泉守殿伊予在国の  
時下国し、其申しひらきな  
どして、我もあり合て一冬  
はなせし也」  
とある。また同書に道七  
についても一つのことを  
書いている。  
「大阪にて秀吉公を桑山  
法印御成し給ひし時、道庵  
来て台子を飾り置れしを、  
さつみや道七御見廻申て、  
彼台子を見て、何者がかく  
しらぬ事仕りたると散々に  
ひいて、即ち道七飾り直せ  
し也、道庵次の間に在て其  
の声を聞き、歴々余の人も  
聞て、いかにも笑止に有  
しに、道庵きかぬ体にも  
なせる仕方、松倉豊州其の  
座に有しとて御物語りあり  
其の時は道七飾もつもの  
ように思ひし前、其の仕方  
も知り給うべき人にひそか  
に尋ね申に、道七は古風の  
仕方、利休、道庵は当世様  
也。台子は道の秘伝なれば  
道庵人に知らせじとのたく

み、尤も心深き事也とぞ」  
と述べておる。「長岡堂  
記」の中では山上宗二、道  
七父子は散々である。  
さて戦国の乱世修羅の時  
代における「憎さ」の人物  
については前記したが、こ  
の時代の趣味として芸術的  
に抽象されているものに茶  
道における憎さの愛好とし  
て井戸茶碗の賞翫と憧れと  
いうものがある。井戸茶碗  
というのは、朝鮮茶碗の一  
種で、古来、朝鮮茶碗のう  
ち最も有名である。井戸と  
いう名称の起りは、室町  
末期の大和国の豪族井戸氏  
が所持していたことから起  
きたというが、一井戸、二  
葉、三唐津と言われて賞さ  
れるようになるのは、戦国  
時代以後のことである。  
従来最も愛好された天目  
茶碗はその整形の美から賞  
されていたが、その天目茶  
碗に代えて秀吉の時代に井  
戸茶碗の愛好が急に盛ん  
になった。天目茶碗の整形  
に対して、井戸茶碗の持  
っている太々しい憎さの姿  
が賞翫されるようになった  
ので、戦国時代の世相が芸  
術の上に、茶道の上に反映  
して来たことを示すもので  
あったと言つてよい。

その井戸茶碗の愛好は特  
に秀吉の好みということに  
よつて名称が高揚されるこ  
とになるが、秀吉も従来天

目を好んで使用していたが  
代わつて井戸茶碗を用いる  
ようになったのである。  
だがここに注意すべきこ  
とは、井戸茶碗が秀吉の好  
みに入る以前に、この太々  
しい憎さの茶碗を極めて高  
く評価した賞した人物があ  
つたことだ、それが山上宗  
二であったのである。  
山上宗二の書いた「山上  
宗二記」にも  
「一、井戸茶碗  
是レ天下第一ノ高麗茶碗、  
山上宗二見出シテ名物ニナ  
ル、関白様ニ在リ」  
とあるのは有名な記事で  
この天下第一といわれる秀吉  
愛用の井戸茶碗は、もと山  
上宗二の発見にかかるとい  
うので、それを宗二から秀吉に  
献上したものであった。それ  
以来、秀吉は井戸茶碗にと  
りつかれてしまったのであ  
る。

自分の発見した最高の井  
戸茶碗を秀吉に献上したこ  
とによつて、秀吉を井戸茶  
碗狂にした山上宗二が、最  
後はその秀吉によつて刺殺  
されるに至つた事実、如  
何にも皮肉なことであるが  
この憎々しい茶碗の愛好の  
感覚が、面憎い人間であつ  
たという山上宗二によつて  
発見されたということはい  
かにも感慨深いものがある  
身を殺してまで、自己の茶  
碗への信条をまげないで、

市井の一茶人でありながら  
天下様に抗して屈しなかつ  
た宗二は、まことに太々し  
い憎さの男であつた。しか  
しそれだからこそ今日まで  
問題にされる男なのだろう  
宗二は正に戦国修羅の茶人  
である。

(三)「山上宗二記」再談義  
「山上宗二記」は、利休  
の高弟山上宗二が死を覚悟  
して自分の茶について知つ  
ていることを伝えようとし  
て、追放の悲痛の中に、流  
浪の困苦の中に、そして最  
後の追つたのを知つた決死  
の思いの中に、伴の伊勢屋  
道七、弟子の桑山修理太夫  
重明や小田原北条氏の重臣  
板部岡江雪斎、また下野の  
大名の皆川山城守広照など  
に次々と書き与えて残そう  
としたものである。珠光が  
能阿弥に問い定めた茶道具  
の鑑定法や名物の由緒を書  
きとめておいたものに、紹  
鷗や利休が自分の工夫を書  
き加えたものを集大成して  
それに宗二自身の鋭い批判  
の観点を加えて成立したもの  
と考えられ、茶道の古い  
伝書としては最も詳細であ  
り、最も信頼のできるもの  
である。宗二はこれを残し  
ておいて、秀吉の惨刑をう  
けて屈辱と憤怒の中に死に  
果てていったのである。

さて、この書の内容はと  
いうに、先づ開巻に茶道の

「山上宗二記」再談義

「山上宗二記」は、利休  
の高弟山上宗二が死を覚悟  
して自分の茶について知つ  
ていることを伝えようとし  
て、追放の悲痛の中に、流  
浪の困苦の中に、そして最  
後の追つたのを知つた決死  
の思いの中に、伴の伊勢屋  
道七、弟子の桑山修理太夫  
重明や小田原北条氏の重臣  
板部岡江雪斎、また下野の  
大名の皆川山城守広照など  
に次々と書き与えて残そう  
としたものである。珠光が  
能阿弥に問い定めた茶道具  
の鑑定法や名物の由緒を書  
きとめておいたものに、紹  
鷗や利休が自分の工夫を書  
き加えたものを集大成して  
それに宗二自身の鋭い批判  
の観点を加えて成立したもの  
と考えられ、茶道の古い  
伝書としては最も詳細であ  
り、最も信頼のできるもの  
である。宗二はこれを残し  
ておいて、秀吉の惨刑をう  
けて屈辱と憤怒の中に死に  
果てていったのである。

さて、この書の内容はと  
いうに、先づ開巻に茶道の

「山上宗二記」再談義

由来を序文の如き形で述べているが、茶道の起りを東山殿足利義政に初まることから説きおこして、義政に召されて近側に侍して茶の湯をおこした珠光を大いにたたえ珠光から紹鷗に受け継がれ、更に利休に至る。本文は、茶器名物を知る限り掲げて、その由来や形状などを説明したいいわゆる「覚悟十体」と「又十体の記」を説き、次に有名な茶湯者の伝、最後に宗二が師匠の宗易から聴問した密伝の注記という四部から成っている。

特に茶器名物の目録書は能阿弥が珠光に授けた秘伝の目録書が原型になっていると言われており、或は多少の参考になったかも知れない。しかし、宗二記は秀吉時代の茶器名物を網羅したものであり、驚くべき宗二の該博な智識と見聞から成っていて、目録書としては後人の又となき参考資料である。この部分だけを抜書にして一冊の書物にしたのが「茶器名物集」と名付けられるものである。全体を通じて見ると、珠光が嗣子の宗珠に伝授したものを紹鷗が受けて改変追加し、宗易(利休)に伝授

され、それを宗二がうけて宗二自身の私説を加えて出来上ったものであるから、珠光、紹鷗、利休の三代で大成された茶道の記録集大成と言ふべきものである。しかも全文にわたって、宗二の先師の所説の整理が行われ、批判が加えられ取捨添削が行われているので、他の秘伝書の如く師説を金科玉條としてそれをそのまま伝えるのとは大いに異なり、秘伝書としては出色であり抜群の書であると言つてよい。

つまるところ「山上宗二記」は宗二が門弟に授けた単なる世に言う秘伝書ではなくて、まさしく利休茶湯いな茶湯の大成を示す大記録なのである。従つて宗二は我が師利休を最高の名人と仰ぎ、随所にその名人たる以所を説いているが、その中には

「宗易ハ名人ナレバ、山ヲ谷、西ヲ東ト、茶湯ノ法ヲ破リ、自由セラレテモ面白シ、平人ソレヲ其ママ似セたらバ、茶湯ニテハ在ルマジキゾ」などと、大いに玩味すべき利休名人評を掲げている。しかし何といつても、宗二が利休に親炙したのは、利休が天下一宗匠の名を得た天正十三年頃までで、宗二はこの年秀吉の追放にあい、各地流浪と遠

国の旅路に入るので、この年以後の師利休を知らないし、京坂の茶道界も知らない。従つて宗二がこの本の全体を書いたときの智識と資料は追放以前の天正十二年頃までが基本となつており、利休はまだ利休の号を称していない時なので宗二記には利休の名称は一切見えず、単に宗易とするか田中宗易とかの名で記されてある。それ故「山上宗二記」は利休、茶湯伝書の經典と言われるが、利休茶湯の大成までを記したもので、その後の展開と爛熟期の記事がないのは注意すべきことだ。

この書物の中には、後世の茶道で用いられる用語や議論になる言葉などがある例えば「一期一会の語は「又十体」の巻の中的一条に、「常の茶湯ナリトモ路地へ入ヨリ出ルマデ、一期ニ一度ノ会ノヤウニ、亭主ヲ敬畏スベシ、世間雑談ハ無用也」とあるところから生じたのである。

この書中に使われた言葉で後世まで問題になる有名なものに、茶祖珠光が言ったという藁屋に名馬繫ぎたがよし」という言葉がある。これはこの「山上宗二」の「覚悟十体」の巻の中的一条に「三疊敷ハ紹鷗ノ代マデ

道具無陀敷寄専一ニス。一種ニテモ唐物所持ノ人ハ、四疊半ニ作ル。宗易異見アツテ、二十五年以来、紹鷗ノ時ニ同ジ、関白様御代ニ当テ十ヶ年ノ内、上下トモ三疊敷、二疊半敷ヲ用フ。珠光ノ云レシハ、藁屋ニ名馬繫ギタルガヨント也。然則、鹿相ナル座敷ニ名物置タルガヨシ、風体猶以テ面白也」と記されてあるのが出典である。

武野紹鷗が管んだ天黒庵という茶室は四疊半であつたが、当時四疊半の茶室といふのは、唐物を所持している茶人が管み得る茶室であつて、唐物一点も持っていない茶人は、それよりも狭い四疊とか三疊とかの茶室を管むのが普通で、四疊半より狭い茶室には唐物を用いるようになったといふのである。このことについて宗二は珠光の言つた「藁屋に名馬繫たるがよし」という言葉である。

さて、「山上宗二記」は名物記録としても最も古いもので、宗二が一代に見聞した名物の由来、所有者、価値、形状、時に取り扱われた代金に至るまで列挙したもので、内容においても後世のもの追隨を許さぬ風格を備えている。その一端を見よう。

名物の筥  
一、平駒 松永代二失、宗達平筥  
藤波平筥二ツ。但此三ツ筥ハ当世在ツテモ不用

一、紹鷗小敷筥 水二升ノ上入  
信長公ヨリ宗二拝領シ関白様へ進上  
一、乙コセノ筥 関白様ニ在リ

此ノ筥信長公ヨリ山上宗二拝領シ関白様へ進上  
一、勢免紐ノ筥 水五升三合入  
関白様ニ在リ

一、ホウロク筥 水三升入  
関白様ニ在リ  
一、引拙祖母ノロノ平筥 関白様ニ在リ

右五ツノ筥、古今ノ名物也  
一、珠光盃筥 代千貫 今井宗薫所持、但当世ハ如何ト宗易非言  
一、紹鷗ノシヤウハリノ筥 此外シヤウハリノ筥トモ、又宗久、休徹、宗甫、善好釣物、万代屋宗安、宗易ノ釣物、昔ヨリ云伝シ筥トモ当世ハ如何口伝

一、引拙大敷之猿筥 大納言秀長公ニ在リ  
右ノ御筥古今ノ名物也  
紹鷗ノ筋筥、是レ数寄道具タルベシ。三ツトモニ大筥也。水五升計

入当世ノ筥ハ大方上へ長ク、口狭キ筥ハヤル第一膚能力好シ、小筥モ形コロ膚サヘヨケレバ数寄ニ入也  
これが宗二物記の書き方である。  
このようにして、山上宗二は自分の全知識を披露して門弟達に伝えたが、しかも最後の結びの言葉を次のように述べている。  
「総則、茶湯ニハ昔ヨリ以来無ニ書物一。唯古キ書物ヲ多ク見覚テ、上手ノ茶湯者と毎々参会シ、作分を出シ、昼夜茶湯ヲスク覚悟ガ則チ師匠ナリ」  
と言ひ、そして終末に「此ノ書ハ初心ノタメニ重宝也。数寄者ハ無用也」と喝破している。  
性格のさがの結果であると言つてしまえばそれまでだが、惜しい人物を無念な死に方をさせてしまったものである。  
(この項おわり)

香川政治載録



# 酒匂川堤の金石文

(開成町、桜井)

## 香川 政治

筆者は健康保持の為毎日早朝自宅より富士道橋(中曾根地先)約一軒、富士道橋(頭首工(開成町吉田島地先)約四軒計五軒の工間を往復ジョキングを日課としているが、このコースは酒匂川右岸の神奈川県青少年サイクリングコースとなっており自転車、歩行者のみで非常に安全でジョキングには最適、この堤防上を毎日漠然と過ごすは無味、ふと目に止まったのが所どころに建てられている石碑の碑文を読んでいるうちそれぞれそれなりの内容に興味を湧き何か無言のうちその地域、附近の歴史を語りかけられるような感入當時を髣髴とさせられるので稿を起した。雑然としてまとまりがないが御笑覧を乞う。

先づ上流の方から記してみよう。

酒匂川右岸十文字橋(松田町西方に架せられている)から南に約二軒位の処、丁度サイクリングコースの起点(大口)から五キロの標示の地点に近代的設備に

より足柄平野一帯の灌漑用堰堤が建設されている。この堰堤を頭首工と呼称されている。

「頭首工」この語源の意味を辞典を繰りてみたが判らない。(御存じの方はご教示願いたい)兎に角この堰堤を頭首工と呼称されている。その側の堤防上の右側に頭首工建設五周年記念碑が建立されている。

頭首工の碑  
所在 開成町吉田島(大井町金手)

建設年月日 昭和五十二年十月吉日

構造 縦一二二センチ 横一〇三センチ

題字 頭首工の碑  
小田原市長 中井一郎

碑文 金田晴美  
碑文(表)

酒匂川は往時より流域一帯に限りない恩恵を与えている。とりわけ西岸七箇所の堰から取り入れる農業用水は足柄平野の農業経営に大きく貢献してきた。

しかし度重なる洪水によって河床に激変をきたし各堰ともその都度多額の費用

と夫役をかけて応急工事を施し辛うじて取水している状態であった。そしてついには取水可能堰が三ヶ所のみとなり、それすらも毎年多額の維持費を要するため管理が極めて困難となり二百ヘクタール余の水田が危機にさらされてきた。我々農民はかかる状況を諸官庁に訴え安定取水を強く要望した結果昭和四十二年県営用水障害対策事業として国の採択を得、翌四十三年頭首工建設に着手し、四年の歳月と五億円余を投じ昭和四十六年度に完成した。長年の辛苦が報はれたことはひとり農民のみならず万余の住民の喜びとなった。以来四百戸余の農家と住民が一体となり用水管理も円滑に実行している。

この事業を偲び当時御尽力を頂いた先起者及び関係官庁にあらためて感謝すると共に取水開始五周年を期してここに記念碑を建立し永く後世に伝えるものである。

(裏面)  
事業主体 神奈川県  
管理主体 小田原市酒匂川水系農業取水組合  
施工業者 K、K間組  
K、K栗本鉄工所  
記念碑建立協力者

と夫役をかけて応急工事を施し辛うじて取水している状態であった。そしてついには取水可能堰が三ヶ所のみとなり、それすらも毎年多額の維持費を要するため管理が極めて困難となり二百ヘクタール余の水田が危機にさらされてきた。我々農民はかかる状況を諸官庁に訴え安定取水を強く要望した結果昭和四十二年県営用水障害対策事業として国の採択を得、翌四十三年頭首工建設に着手し、四年の歳月と五億円余を投じ昭和四十六年度に完成した。長年の辛苦が報はれたことはひとり農民のみならず万余の住民の喜びとなった。以来四百戸余の農家と住民が一体となり用水管理も円滑に実行している。

K、K明治製菓足柄工場  
中央研究所  
K、K小西六写真工業小田原工場  
田原工場  
白石寄附 勝俣組  
記念碑建立者  
酒匂川水系農業用水取水組合

組合長 池田 六郎  
副組合長 栢沼 貞雄  
理事 配島 利雄  
府川 茂  
木村 四郎  
小沢 豊  
池田 弥平  
津田 幸男  
金子 正積  
磯崎 勇一  
高橋 亮平  
古沢 正一  
大野 藤江  
杉田 基之  
小野静夫  
加藤 喜好  
加藤 晃  
米山 茂  
市川 光利  
曾我 資成

施行 倉科石材店  
頭首工建設の経緯  
我々子供の頃(大正期)は毎年のように四月になると、農家は「戸別」に水門口を掘り割った用水を取り入れるため作業の夫役を割り当てられ、この作業に欠席すれば「ブッコミ」といって高負担金を支払わされた。農家はかんがい用水の

確保のために各々大きな責任と義務があったものである。当時足柄平野のかんがい用水は、その地域により酒匂川、仙了川、要定川狩川等の河川から主として取水しており、その方法は地域毎に様々であった。ここでは酒匂川取水について記してみる。この「掘り割り」とは春の彼岸頃から秋の彼岸頃まで(田圃に水が必要な時期)、それぞれが地域の水門口を定め取水した。これが慣例となり「取水権」が生まれ以来その権利を守り、農業用水、一般家庭用水を確保してきた。特にかんがい時期以外は大量の水を流入しない関係で少々の雨でも土砂が流入し水門口を埋没してしま

うので、この土砂の取り除き作業を「掘り割り」といった。ところが昭和三十八年頃から酒匂川の砂利の乱獲により河床の低下著しく、右岸では中曾根水門、三ヶ村五ヶ村、新せき、上水門等の五ヶ所中、五ヶ村と上水門の二ヶ所だけ取水可能で中曾根水門のごときは三十七年堤防改修の折、県、建設省が多額の金子を投じて水門を改修されたが、河床低下のため一滴の水も水門に入らなくなった。また、左岸では鬼柳、桑原の二ヶ

所にあるが鬼柳水門しか使用出来なかった。このため左岸地域では「左岸土地改良区」を設け、松田地内で酒匂川、川音川の河床下を導水管を埋没して、松田より大井町、曾我を経て国府津に至る大規模な範囲に亘る用水確保を行った。

前述のように左右両岸で三ヶ所だけ取水しているが取水方法は極めて原始的で「蛇かご」を用いて五〇〇メートル或は千メートルの導流堤を作り辛うじて取水していたが、その年、年により時には濁水あり、洪水ありで、その都度大勢の夫役と多額の出費で米作農家は勿論一般家庭でも水利費を出すことが悩みの種であった。

このような悪条件を切り抜け策を地元代表者は一致協力し県への陳情にお百度参りを続けた結果漸く県側も「災害復旧工事」として採択され、これが工事も完全ではなく、両岸とも長い導流堤が河床低下のために洪水の時は水勢が変わり、その都度応急処置を施すか或は水路の掘り割り等以前として旧態前の繰り返しで辛うじて取水していた。その上鬼柳水門は大蔵省印刷局小田原工場と共同取水をしておったが為に大半の工費は同工場側が負担をしてい

所にあるが鬼柳水門しか使用出来なかった。このため左岸地域では「左岸土地改良区」を設け、松田地内で酒匂川、川音川の河床下を導水管を埋没して、松田より大井町、曾我を経て国府津に至る大規模な範囲に亘る用水確保を行った。

たが度々の災害などによりこのような方法では安定した取水が出来ないという理由で、印刷局は独自に富士道橋下流約四〇メートルの地点に県の認可を得て多額費用を投じ水源変更に踏み切ったが、鬼柳水門は鬼柳桑原。成田の三地区の受益者みで負担することになり各戸の負担増は前途に経済的な暗い兆しを生じてきたそこで左右兩岸の関係者は小田原市一県一國へとそれぞれ地元出身の議員諸先生方の絶大な協力を得て漸く県管工事として認可あり昭和四十四年度より四ヶ年の歳月と巨額の費用を投じてこのような立派な設備が出来酒匂川の名称の一つとも言える。

次計画と工事の進め方  
昭和四十三年度設計費四百万円。  
昭和四十四年度 水路工費三千四百二十二万六千円(水路千三百九十六メートル)  
昭和四十五年 右岸本体工事費二億一千万円  
昭和四十六年度 残り本体工事費二億七千六百三十五万円 負担国が六五%、県が三五% 県管工事として間組が請負う  
位置 開成町吉田島〜大井町金手  
型式 頭首工はフロートタイプ  
型式 コンクリート造り

受益面積 右岸二三・八ヘクタール  
左岸六一・一ヘクタール  
堰堤 二三五メートル一〇土砂吐 七メートル五〇  
洪水吐 二一三メートル四〇  
魚道 一〇メートル  
取水量 右岸一九〇九立方メートル  
左岸四六二立方メートル  
何れも油圧式自動転倒方式  
洪水時 全可道転倒ゲート  
尚河床安定のため「床止工」施工  
頭首工の碑から更に南下すること約一キロ堤防の左側草むらの中にポツンと小さな碑がある。題字もなく碑文のみ刻されている。  
所在 小田原市曾比地先建設年月日 昭和二十二年六月

力説し村民亦よくこれに協力し農繁期を目前に控えながら唯一人の不平を洩らす者なく涙ぐましい努力が続けられ遂に工事は完成した農の沼沢忽ちにして美田と化し地主は土地の誕生を喜び村民は食糧事情の明るさを悦びあい其筋よりはこれに工事完了を記念する碑に刻する  
昭和二十二年六月 桜井村曾比

【解説】碑文の「土手間」について説明してみよう。  
酒匂川土手(堤防)の築堤の工法は大口堤から下流には左右兩岸とも「カスミ」(クイチガイともいう)という工法を用いている。万一洪水により本堤が決壊すれば一定の距離を置いて控堤があるので。この控堤で受け止めた水を、再び本流へ流入するという。今考えると広い土地が無駄のようになり思うが一朝有事の場合の役割りはすばらしいものである。丁度この碑の建てられている堤防は控堤に相当する処で左側百メートル位隔てて本堤がある。この本堤と控堤との間を「土手間」と云う。この間の肥沃な水田を見るにつけ転だ感無量。  
二宮先生松苗栽植遺蹟碑所在 小田原市東栢山地先

# 酒匂雑記

川瀬春雄

酒匂川堤防右側建設年月日 昭和三年  
構造 縦一一六センチ 横八〇センチ  
題字 二宮先生遺跡  
碑文(表)  
先生若年ノ頃松苗二百本ヲ植エラレシ所ナリト伝フル

坂口堤ニシテ推譲ノ徳高キ先生ノ嫩芽ヲ見ルノ心地ス昭和御大典当年桜井村青年団東栢山支部(解説)酒匂川の右岸堤上報徳橋の南百メートルのところにある。

その歴史を伝へている。この記述の内「今の所在」の字句をその儘現在の裏通りの南蔵寺と考える人のあるのは止むを得ない事であるが、実は酒匂町の人々の言伝へにも既に忘れられた八十年前(明治三十五年)の天災によって「今の所在」に存在する。ところがこの内の南蔵寺だけが何故か東海道の北側の裏通りにひっそりと建っている。

酒匂村の古寺である南蔵寺について新編相模風土記稿の中の酒匂村南蔵寺の項に「酒匂山不動院と号す。古義真言宗(国府津村宝金剛寺末)寺伝に古は福田寺と号し寺地も今の所在より四・五丁隔ててあり(村内不動免と呼ぶ水田はなり。今も当時の持ちにて租地なり)今の寺号に改めし年代詳かならず……」とあり、

がはっきりしている。今もその入口であった二メートルほどの通路の片隅に小さな五輪塔十基分程が積上げられている。その五十メートルほど海よりも供養塔五輪塔等が一ヶ所に建られている。これ等は南蔵寺のあった名残である。

ではこの南蔵寺がどの様な理由で何時裏通の現在地に移転したのであろうか。これについては中野敬次郎先生著書、小田原百年史の中にも見える明治三十五年九月二十八日の小田原地方を襲った暴風による大海瀧(波高六メートル)の為、小田原町だけで全潰家屋一四四、半潰六九、破潰五五〇、流失二九三、死者一二〇の大被害があり、酒匂村でも死者三(其他の被害記録なし)を出したと言う。家屋の被害についての記録は残っていないが小田原町の被害から考えれば可成の倒潰、流失があったろう。この大天災によって海岸に近かった南蔵寺は大きな被害を受、その後現在地に移転したものである。

二 福田寺について  
南蔵寺の前身であったと言う福田寺について今はその寺号を知る人もないが風土記稿の記述に「寺地も今の所在より四・五丁隔ててあり(村内不動免と呼ぶ

水田是なり、今も当寺の持にて租地なり」とある。この記述にある(不動免)とはどこか、これが明確になれば問題はないが百四十年前の字名は今のところ知る手掛はない。次に「四・五丁蹟てあり」とあることから移転前の南蔵寺を中心に半経四・五丁で円を画いてみたが福田寺の跡地に比定できそうな場所が今の町からは見当らない様である。ただ「不動免と呼ぶ水田是なり」とあるところから、この水田の字句が幾分の暗示を残している様に思へる。「四・五丁蹟てあり」と言う事と「水田」であった事を考えると当然東海道を隔てた北側であった事に間違いないであろう。また、村の鎮守駒形社(現酒匂神社)の別当寺であった事、四・五丁と言う距離からみてもこの酒匂神社の周辺ではなかったかと考えられるがどうであろうか。

日八月九日御台所御産氣。鶴岡神社仏寺、奉神馬、被修誦経、福田寺酒匂 按ずるに仏閣十五寺の一なりしと記述の如くこの十五の寺社は東鑑によるもので別の記録によると十八の寺社とも言われている。その内の相模の国に於ける特に著名なものとして寒川神社、川句神社、箱根神社、大山寺平塚八幡宮等の名が見える酒匂村の福田寺が何故これ

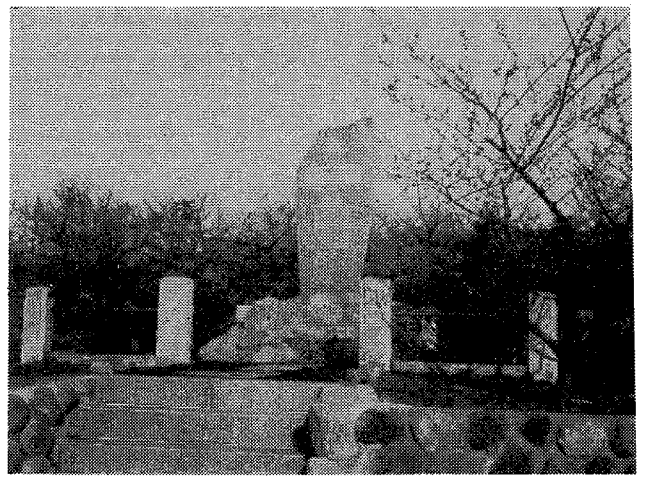
# 自修学校物語

西山 銈太郎

等の内の一つとして選ばれたのかについては風土記稿の記述の如くで、寒川神社や箱根神社等と肩を並べられる様な寺であったとは考えられない。しかし南蔵寺の前身であったこの寺がこの時代既に存在したと言いう事は酒匂村の古い歴史の一つを物語るものであり村内の十指に余る寺のうちでも特に古い存在であった事がわかる。 八二二五

一、記念碑除幕式  
此の度、小田原市上曾我仲河原梅林の中の瑞雲寺本堂西側に「自修学校発祥の地」の記念碑が建設され、昭和五十六年二月十一日、その竣工除幕式が行われた当日は大変強い風だったが故校長大井竜跳先生の御遺族を始め、向上高校から宮崎校長、平井教頭、元自修学校の先生で御健在の方等多数の来賓と校友二百名の参列を得て盛大に、然も厳肅に行はれた。

先づ、一同集合の上、開式に先立って校旗の入場、紫色の地に金の校章を縫いつけた古色蒼然とした校旗には、何十年振りかの再



会で参列者一同深い感激を覚えた。  
除幕は大井校長先生の令孫小学校五年生の大井昌子さんの手に依ってなされた瑞雲寺本堂前広場に於ける乾杯に依って始まった祝賀会場では、比較的新しい卒業生でも四十年振りの再会であり、五十年六十年振りの人々も多々あった。胸の入学年と氏名を書いたりポンを見て、校友を見出した時の喜びは格別だった。祝賀会は立ったままで、文字通り粗酒粗肴だったが、尽くの人々が満足した。周囲一帯の梅林は五分咲きだったが、何十年來の話に咲いた花は満開だった。或る

年次はクラス会を結成する約束が出来上り、或るグループは二次会を行う相談が忽ちに出来上った。  
私も卒業以来五十四年になるが、その五十余年振りの級友が多数あった。又昭和十二年以来約三ヶ年勤務した時の生徒諸君も多数あり「しばらく」と固く手を握り合った。先輩からも後輩からも、建碑を喜び、又その音頭とりをした事を感謝された。そして多くの人々から、今日の集いを今日だけに止めず、熱海々岸の貫一ではないが、來年の今月今日、再来年の今月今日、五年十年後の今月今日

も、此の梅林の中の今日の様な会を計画せよとの強い要望が出た。  
第二十九回生川瀬連雄氏は、次の一詩を自ら作り吟じて、大井校長先生への感謝と建碑の喜びを表はした。  
辞蚪子碑建  
自得修身創学銘  
青香馥馥鎮梅庭  
龍師五訓二曾孝  
不變惺玲郷土爰  
昭和五十六辛酉年二月  
第二十九回川瀬鳳山作  
蚪子生川瀬鳳山作  
尚除幕式に先立って御案内状を差上げた処大井誦玄先生からは、次の一偈を書

いて出席の返事を頂いた。  
祝除幕式偈  
巍々自修園 嘗出智慧水  
廻為真友情 能度諸有縁  
大井誦玄  
二、創立前夜  
大井竜跳先生は、明治十年の生れである。瑞雲寺二十世哲俊和尚は明治二十八年七月遷化されたので、長男である先生は、二十一世を継いで任職となられた。  
駒沢大学の前身曹洞宗高等学林に学ばれたが、檀家では、生来豪胆なこの和尚に、東京の学校を卒業させてしまつては、こんな田舎の片隅の寺に居るのがいやだ等と云はれては困ると許りに、卒業させないで連れ帰つてしまつた。戦前は田舎にはよくあつた話で、長男に余り勉強させて、家業を継ぐのがいやになつてしまつと困ると云はれたものだ。先生も亦旧い習慣にしがばられた犠牲者とも云うべきか。  
帰郷後は、近隣の青年の為に夜学会等を開いて居られた。明治十五年生れで、小学校の義務教育四年と高等科二年だけの私の父が日本外史や国史略其の他漢文の書籍を持つた。父は「おっさん(私の家は瑞雲寺の檀家だから)に漢文を習つた。」と云つた。  
明治三十四年八月二十四

日から、曾我小学校に代用  
教員として勤務された。此  
の間も課業済み後は希望の  
児童に英語等を教えて居ら  
れたが、これを以て必ずし  
も満足せず、明治三十七年  
七月二十九日退職して、瑞  
雲寺の本堂に於て青年の教  
導をされた。

寺小屋と云う教育場所は  
必ずしも寺院のみに開設さ  
れた訳ではない。又寺院は  
何処でも必ず寺小屋を開い  
たと云う訳でもなく、小田  
原史談会々報第五十号に依  
ると、寺院でのそれは案外  
少なかった様である。然し  
瑞雲寺では行はれてた。そ  
れはその寺の住職の熱意と  
その地域住民の教育に対す  
る関心度に依るものと思は  
れる。

大井先生の教育に対する  
熱意は確く、最初は自修学  
舎、後、明治四十年四月か  
らは自修学会と称された。  
曾っての寺小屋にも、例へ  
ば寿昌寺教習所の如く名称  
が附せられてたと前記史談  
会々報の示す如く、見方に  
よって自修学舎なる寺小  
屋或は塾を開かれたと云  
うべきである。然し自習学  
会と称された頃は既に立派  
に学校としての形態が出来  
て居た模様である。自修学  
校第一回の卒業生は、この  
自修学会時代からの引続き  
であるが、その一人下沢英

俊氏は、「自修学校になっ  
たからと云って、今迄と何  
等変る処はなかった。」と証  
言された。それでは学校に  
なつてからでも最初の中は  
適当だったかと云えばそう  
ではない。下沢英俊氏は、  
卒業後引続き東京の中学校  
に学ばれたが、三年を飛び  
越えて第四学年に編入試験  
を受けて美事合格された。

計画的に組織的に高度の教  
育をされたかが判断される  
又後に述べる伊沢修二氏の  
贅辞を見てもよく判る。  
そしてここに学んだ人々  
は、各地区の中堅人物とな  
つた。  
自修学校に学んだ人は、  
必ずと云う程佐藤海軍大尉  
或は佐藤海軍中佐等年代に  
依つて階級は異なるが、日  
本海軍戦等の講和を聞かれ  
たと思う。此の佐藤源蔵氏  
は太平洋戦争中は海軍中将  
で、多くの武勲を重ねられ  
たが、戦争末期に惜しくも  
戦死をされた。此の方も学  
校になる以前に、大井先生  
の薫陶を受けられた一人だ  
つたのである。

三、自修学校の創立  
当時小田原近辺では県立  
の中学校が小田原に一つ、  
足柄上郡吉田島村に三年制  
の乙種農業学校があつただ  
けで、又当時の経済力から  
云つても進学可能人員は至

つて少なかった。かかる社  
会情勢下に於て、将来有為  
の青年で、進学の機会に恵  
まれない者の多いのを嘆か  
れた大井竜跳先生は、実質  
的に学校と何等異なる処な  
い迄に整備発展した自修学  
会を廢して、明治四十三年  
七月六日、自から校長とな  
り自修学校を設立された。

教室には引続き瑞雲寺の本  
堂・庫裡等が使用された。  
今日に於ても尚新鮮さを  
失はないJとSを組み合は  
せた校章(当時は帽章又は  
徽章と云はれた)も制定さ  
れた。又当時としては珍ら  
しく女子にも門戸を開放さ  
れたので、女子の学校の少  
なかつた昭和初期迄に、数  
十名の女子生徒が入学し  
た。

誠に時宜に適した学校で  
あるとして、各方面の協力  
援助は大したものだった。  
創立二十周年を記念して、  
昭和五年九月に発行された  
「校友会員名簿」の冒頭に  
は、次の各氏の名前が記載  
されている。  
本校名と願問(位次不同)  
従三位勲三等 西岡 逾明  
正四位勲三等 貴族院議員  
樂石社々長 伊沢 修二  
貴族院議員 江原 素六  
衆議院議員 長谷川豊吉  
足柄上郡長 吉沢 誠一  
賛助員  
曾我村長 柏木幸次郎、下

曾我村長 市川泰蔵、曾我  
村 下沢大吉、田中弁次郎  
根岸幸次郎、柏木佐太郎、  
柏木十九五郎、徳田浦次郎  
鳥居常次郎、稲毛高三郎、  
杉田佐久蔵、井上定次郎、  
矢島仙太郎、奥津長太郎、  
久保寺磯吉、久保寺波蔵、  
小沢八十次郎、井上熊之助  
相田鶴吉、市川峯吉、杉崎  
喜代蔵、杉崎寅吉、石井為  
次郎、石井柳蔵、磯崎弥十  
郎、牧野岩太郎、石井良助  
久保寺豊三郎、門川鎮十郎  
清田房次郎

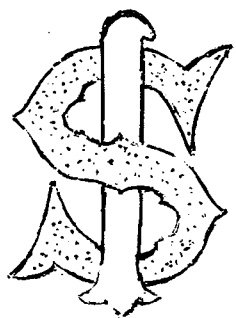
下曾我村 長谷川揆一、穂  
坂保三郎、長谷川惣五郎、  
川久保仲次郎、内野熊太郎  
穂坂西蔵、中村民蔵、長谷  
川良輔、乙部松太郎、鳥海  
兼蔵、佐宗紋治郎、中村菊  
之助、穂坂良蔵、中村大次  
郎、柏木常次郎、神保猪太  
郎、神保幸太郎、秦龜太郎  
小林理佐之助、渋谷善太郎  
(終りの四名は上  
府中村か)

賛助員中、村長  
以外は肩書が書い  
てないが、これを  
昭和三年十一月下  
曾我村役場発行の  
「下曾我田島郷土  
誌」によつて、下  
曾我村関係の人々  
について見ると、  
何れも当時の村会議員・区  
長若しくは、過去又は将来  
に於て、村長・助役・収入

役・村会議員・区長或は県  
会議員・郡会議員等を歴任  
された方々である。随つて  
曾我村関係に於ても同様と  
思はれる。大井先生が住職  
でをる瑞雲寺の檀家は、此  
の両村に跨がり、又地理的  
れも下曾我のすぐ傍だった  
関係もあり、両村は代表者  
を送り、全力をあげて協力  
賛助したものと思はれる。  
更に「足柄上郡誌」によ  
ると「曹洞宗の永平寺・総  
持寺の両大本山並びに地元  
曾我村からは補助奨励金が  
支給された」とある。

校章は誰れが考えたかを  
第一回生下沢英俊氏に尋ね  
た。下沢氏は、学校になつ  
た時先生から、「皆で帽子  
徽章を考えて見よ。」と云は  
れ、夫々に考えて書き提出  
をした。然し最終的には先  
生が決められた。と証言さ  
れた。  
自修学校々章

四、草創の頃  
貴族院議員伊沢修二氏は  
日本音楽教育の先達で、文  
部省の教科書編集局長・東



京高等師範学校長等を歴任  
された。  
此の伊沢氏が創立直後の  
自修学校を視察して、その  
教育内容が充実し、その教  
育態度の直撃なる様にいた  
く感激して、特に紹介する  
に「農業世界」に掲載せら  
れた。農業世界は博文館発  
行で、当時最も権威ある農  
業月刊誌だった。此の事実  
は誰もが知つて居ながら、  
只大正の始め頃であろうと  
云うだけで、その内容等知  
つて居る者はなかつた。今回  
元下曾我小学校々長で、郷  
土史研究家、西大友の古宮  
万寿夫氏が、或は県立図書  
館に、或は国立国会図書館  
に、或は民間蔵書家に足を  
運び苦心の末遂に「農業世  
界」明治四十四年五月号を  
発見された。私は二月十一  
日、記念碑除幕式の節、建  
設発起人代表の式辞を述べ  
たが、その中に、古宮氏の  
御好意に依り、特に御了解  
を得て、この農業世界の  
の次の文を引用して、参列  
者の一同に深い感銘を与え  
た。即ち

「……この村に大井竜  
跳と云う僧侶がある。年  
令は三十余才ならんか、  
自修学校というものを設  
けて該地方の青年に向つ  
て中学校程度より稍々低  
度の補習教育をやつてい  
るが、その教育は極めて

真面目で、道徳堅固であるから、この自修学校が出来てから、その感化を受けて、該地方の風俗は一変して善くなつて来た」と称せられている。

又小学校教師や宗教家が真面目に活動する事を望み

「要するに教育は精神的でなければならぬ。単に形式に流れて、空しく農業機械や標本等を並べたばかりでは仕方がない。教育のよく効果を奏する所以は、全く精神教育を行うからである。」

と云い、次には又仏教家の地域と於ける青年教育に奮起を促して、更に

「一例をあげれば、曾我村の自修学校に通う生徒は、一里も二里も厭はないで、朝早くから、露を踏んで、愉快に通つて楽しく業を励んで居る……」

と云つてある。誠に自修学校の真髓を穿つて居る。大井竜跳先生が教育家として如何に卓見を持って居られたか、今更ながら敬服の念を深くするものである。

学校として発足してまだ一年にも満たないのに、伊沢氏がこれだけの賛辞を惜しまなかつたのは、学校認可前の自修学会又は自修学会時代から、大井先生が如何に熱意を以て教導された

かをうかがい知るに十分である。

尚伊沢氏がどうして、当時の斯様な田舎まで足を踏み入れたかと云うと、伊沢氏の別荘が当時酒匂にあつて、その管理人の子供が自修学校に学び、その折目正しい生活態度を見て、学校を見て見ようとする考えになられたのであらうと古宮万寿夫氏は云はれる。

生徒は逐次その数を増して、到低本堂・庫裡だけでは収容しきれなくなり、本堂の西側境内の敷地二九六坪に、教室三・事務室一、計六二坪の平家校舎一棟を新築し、大正二年二月十一日落成式が行はれた。此の経費は二千六百元を要したが、内二千二百円は寄附により、労力は一切地元上曾我青年団、並びに在學生徒の労力奉仕によつてなされた」と「足柄上郡誌」は伝え

て居る。更に同書は「卒業生は神奈川県工業学校・師範学校・横浜商業学校・鉄道教習所等へ入学するもの及び直ちに鉄道従業員となる者多し」。「本校の特徴、午前八時始業正午終業とし、毎日半日は家業を手伝得る様にするを以て就学を容易ならしむ。尚特待生を置き学業奨励として授業料を免除す。此の如く本校は益々隆

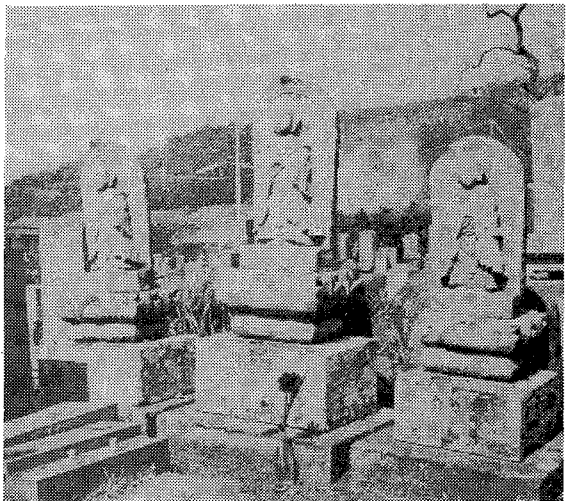
盛に赴き、年を追うて発展の域に向いつつあれば将来維持方法の完備、教師の充実等により私立中学校の実現を見るに至らん」と云えている。

五、関東大震災

自修学校は順調に成長し発展した。明治四十三年度第一回の卒業生は十一名だったが、逐次その数を増し第七回卒業生は始めて五十名を越えた。まだ義務教育の小学校尋常科六ヶ年だけで、社会へ出なければならぬ者も多かつた時代であるので、尋常科から入つた生徒も多数あつた。高等科二年卒業して自修学校に入り修業年限二ヶ年のこの学校を卒業し得る者は、割合恵まれた環境にあつた者である。入学者の半数近い生徒は、中途退学して或は家業を手伝い、或は就職した。(勿論中途退学して他校へ進学した者もあるが。)大正何年頃の事か「足柄上郡誌」に、生徒教三九〇名で内尋卒者一六五名、高卒者二三五名の記録がある。此の数字は大正から昭和の時代が進むに随つて、尋卒者の比率は低くなつて行つた

が、好事魔多しとか、大正十二年九月一日の関東の大震災は学校に大打撃を与えた。大井校長先生を始め多

くの人々の、善意と努力の結果自修学校の校舎は一瞬にして壊滅した。瑞雲寺の住職である大井先生は、寺の本堂と庫裡をも同時に失つてしまはれた。不幸はただそれだけではなかつた。長男十五才、五女六才、次男四才の三人の愛児をも、同時に失はれた先生の心情察するに余りあるものがある。



然し剛毅な先生はそれ等に屈する事なく直ちに学校の復興に努め、続いて瑞雲寺本堂は以前より遙かに豪壮な規模で、大正十五年中に建設を終つた。何処の家庭でも震災の打撃は大きく、その一つの表はれが、義務教育を終つた

回卒業生	入学年	卒業年	卒業者数	中退者数	子供の学業放棄となつた。次の表の如く、大正九年、十年と入学者は順調に増えて行つたが、震災時に在学中の第十四、十五回生は多
12	T 9	T 11	96	83	
13	10	12	94	112	
14	11	13	63	131	
15	12	14	111	158	
16	13	15	98	81	
17	14	S 2	131	90	
18	15	3	134	71	

原稿を御送り下さいました皆様は厚く御礼申し上げます。御送り下さつた順に発表したいと思ひますが紙数の関係で遅れて居る方が御座いますが悪しからず。先月不慮の災難で印刷屋さんで御怪我されました、まだ全快されませんが無理して出して下さいました様なわけですが、全快されましたら予定の回数は発行したいと思ひます。印刷屋さん早く全快する事を御祈りすると同時に今回の遅れました事を御詫び申し上げます。 杉崎

編集部より



数の中退者を出し、又大正十三年四月入学の第十六回生は大幅に減り、第十七回の大正十四年入学になって旧に復した。こうした大打撃があつたが、大井先生は同志満々、引き続き修身・国語・漢文・数学・英語・習字・珠算等につき、中学校三年・四年程度の教科が教授され、特に人倫道徳については、その校名の示す如く情熱を傾注された。